

# <ざわめき>に耳を・・・

川俣部保明

人文社会科学研究所教授 現代語・現代文化学系長

昨年11月、TWINSをとおしてなされた学生による「1学期共通科目授業評価アンケート」の結果が送られてきた。項目は4つ。<1. 授業に対する取り組み>と<2. 授業に対する満足度>に対してはそれぞれの回答肢a. b. c. (1. は<a. 十分、b. 普通、c. 不十分>、2. は<a. 高い、b. 普通、c. 低い>)を選んだ学生数が示されており、<3. 良かった点>と<4. 改善してほしい点>に対しては、寄せられた回答が文面のまま示されていた。学生の授業に対する意見と要望を、数字と文章によって簡明に把握することができ、担当の方々の何年ものご努力のすえ、完成度の高いアンケートになっていることがうかがわれた。

しかしこの形式上の完成度とは別のところで、ひとつどうしても気になったことがある。

私は1学期のあいだの適当と思われる時期に、うえと同じ授業で何度か学生の<授

業評価>を受けた。といっても、学生諸君にA5の小さい紙を渡して、授業への感想や意見を書いてもらうだけのことだが、授業の最後の余韻が残っている教室で、無記名で自由に書いてもらうので、それなりにシビアな意見や要求が返ってくる。そして当方も、授業の余韻のなかですぐに回答を読むことができるので、書かれてある意見や要求はこちらの心にそのまま深く入り込み、根を下ろす。「板書は左から順番に書いてください！」と生の字で書いてあれば、次回から絶対にそうしようと即座に心に誓うことになる。このいかにもホットな雰囲気が、先の「アンケート」3. 4. の回答を読むときには、同じようなことが書いてあっても、漂ってこないのだ。どこか、学生諸君とのあいだに距離感がのこり、文面はこちらに向かって直接に語りかけてこない。

この距離感を私は、上記項目1. 2. の回答結果の数字に対しても、同様にもってし

まう。1. のa. b. c.がそれぞれ何名、と示されても、a. が多くて嬉しい、c. が多くて残念、以外の感想が湧き上がってこない。それ以上の具体的な、学生諸君の意見や要求の、肌ざわりの意味内容が、伝わってこない。

もちろん、アンケートを数値化、機械化すれば具体的な肌ざわりが消えるのは当然で、むしろだからこそ結果を客観化しうるし、外部に向かっても<授業評価>活動を数値として示しうるわけだ。しかし一方、万が一にも<授業評価>をそのような数値化、機械化とのみ考えるようになってしまえば、その瞬間からわれわれは、<授業評価>の本来もつべきもっと個別的な側面、すなわち、教壇にたつ教員が、教室の学生諸君の意見や要求を、教室の空気なかで彼らの息吹として直接に受け取り、それらを次の授業から即座にとりいれ、そのこと自体をとおして学生と教員のコミュニケーションを図るといふ側面を、置き去りにしてしまうことになる。言ってみれば、数値化、機械化のせいで、教室という現場のざわめきが消し去られてしまうのだ。

他の場面、たとえば科研費の獲得額が云々される場面でも、私は同様の危惧を感じる。われわれの研究費における科研費等外部資金の割合が多くなってきている今日の制度上、研究を十分な環境で進めるため

に科研費が大きな役割をもっていることは否めない。しかしそのことと、科研費獲得総額の多寡を当該機関のステータスと結びつけることとは、べつのことである。毎年その時期になると学内の会議でも、全国の大学の科研費獲得額ランキングが示される。そのこと自体は、事実に関する情報の提示なのだから、なんの問題もない。しかし、「だからもっと科研費を獲得し、○×大学を追い抜こう」とか、「だから科研費申請実績を他の評価にもとりいれよう」という方向へ意識が向かいはじめた途端、われわれは数値化の魔力に負け、科研費に関する数値のみを見て、その数値のせいで行われている具体的な研究のもつ意味内容、具体的なざわめきの肌ざわりを、忘れてしまうことになる。ここにも、数値化のせいで、われわれの思考から現場のざわめきが消し去られてしまう危険がひそんでいるのだ。

さらに別のことを考えてみよう。一見上述の数値化とは無関係なことだが、そこにも私は同様なざわめきの消去があるのではないかと危惧している。<国際性>に関してである。

現代において、英語が世界語であることは論を俟たない。世界の最も多くの人々と<理解し合う>ために世界の最も多くの人々が頼っている言語は英語である、とい

う意味で。事実としてそうだ。だから、「ある個人が国際的であるということは『英語での会話を通して、相手の論理を理解し、自分の考えを論理的に相手に伝えることができること』(『筑波フォーラム』71号p.123)であるというご意見に、私は全面的に賛成である。だがそこに私は、おそらく誰もが思っていないが<国際語=英語>を話題にするとき(多分当たり前すぎて)誰も進んで口にしないことを、但し書きとして付け加えたい。誰もが思っていないが誰もその但し書きを口にしないとき、<国際語=英語>は暴走をはじめかねないからだ。つまり、<英語を通して論理的に理解し合えること>は、<国際的>であるためのこのうえなく頼りになる条件だが、しかし<国際的>であるための必要条件でも十分条件でもない、ということだ。英語を操れなくても日本語や中国語その他あらゆる言語(スポーツ言語や音楽言語まで含めそういった言語は無数にある)をとおして人と人は<国際的>な会話をすることができるし、逆に英語が操れても相手がそうでなければ<国際的>な会話はできない。

というのも、英語を話す人々が世界のすべての人々ではなく、英語であるいは英語に置きかえて<理解し合った>ことが、世界の人々が理解し合える/し合うべきすべてのことではないからだ。そもそも英語の

論理に乗ったことは、英語の論理に乗ったことでしかなく、その外側には英語の論理に乗らない無限大のことがらの数々があるのだ(英語を母語とする人々の中にも勿論あって、だからじつは彼らも<国際語>と<英語>の同一化に内心苛立っているはずなのだ)。だが<国際語=英語>が独走しはじめるとき、<国際語=英語>の論理に乗らないこれら無限大のことがら、つまり、<国際語=英語>の論理の明晰さに乗らないこれら無限大のことがらの数々は、たんなる無数のざわめきにすぎないとみなされ、クリアーではないものとして<国際論理>から消去抹殺されてしまう。

人が息をし生きている限り、クリアーなサウンドはなくともざわめきは必ずある。だが、ざわめきがないところに、クリアーなサウンドはありえない。クリアーなサウンドは、ざわめきを土壌とし、ざわめきから生まれ、ざわめきの厚みによって響く。そうやってクリアーなサウンドは、じつはわれわれに、そうやってしか聴くことのできないざわめきの世界をこそ、語り、聴かせてくれているのだ。

だから私は、TWINSによるクリアーな集計、科研獲得額の数値的な意味づけ、<国際語=英語>による相互理解の可能性などを、否定するものでは全くない。こういっ

たクリアーな形でのものごとの把握が、世界にアプローチする際のわれわれの行動の骨格を支えていることは間違いない。ただ私は、そういったクリアーな部分は窮極には、人々のそれぞれの行動の現場のざわめきからこそ生まれたものであり、そしてそのざわめきの無限にひろがる響き合いの表面に現れた、人のもちうる音域のほんの一部分でしかないこと、したがってわれわれはそのクリアネスをとおして、そのむこうに、われわれの広大なざわめきの領域をこそ聴こうとすべきである、ということ強調したいのである。

ざわめきから切り離されたクリアーなものは画一でしかなく、画一と化したクリアネスからは、いかなる肌ざわりも生まれず、いかなる相互理解も生まれぬ。それは、TWINSについても、科研費研究についても、英語使用に関しても、同様だ。そして、独走したクリアネスが最終的にどのような危険をはらむかは、われわれにはすでに周知のとおりである。第二次世界大戦直後の1949年、ある詩人が語った言葉、「国家論理にうごかされる人間は、自分が百万人の誰それを殺したのではなく百万の数字ナンバーを廃棄したのだと考えて、安穩としていられるのです」(Ph. Jaccottet : "La crise de la poésie ou de Rilke à Artaud") という言葉を思い出す。もちろん、半世紀前と現在では状況がまった

く違う(ある意味では)。しかし、数値化され、機械化され、あるいはなんの阻害音もなく理解されていった論理だけをわれわれが信じ、そこだけに価値を認めるようになってしまえば、その瞬間からクリアネスは暴走をはじめ、あらゆるざわめき(つまりあらゆる想像・創造性)は無視され、廃棄されてゆくことになる。そうなったときにはもうわれわれは、ざわめき=想像・創造性を廃棄しているという意識すらもはやもてないだろう。ただ、膨大に振られた数字の数々を機械的に効率よく処理しているという感覚しか、もはやもてないだろう。

だから私の提言は、ただひとつのことである。〈授業評価〉の回答をとおして、科研費に関する数値のうらに、あるいは英語的国際理解のクリアネスの背後から、膨大に聞こえてくるざわめきのひとつひとつに、丹念に耳をかたむけようという、ただそのことだけである。

(かわなベ やすあき/日仏比較ポエジー論)